

札幌
芸術の森
美術館

×
札幌
国際
芸術祭

S I A F
ふ。む。
ふ。む。
シリーズ

きみの
みかた
みんなの
みかた
特別
ガイド
ブック

「きみのみかた みんなのみかた」
札幌芸術の森美術館
2022年1月22日(土) - 3月13日(日)

美術館の豆知識 → 1ページへ

注目作品ガイド → 5ページへ



編集・発行：札幌国際芸術祭実行委員会／札幌市
監修：吉崎元章（本郷新記念札幌彫刻美術館館長）
協力：札幌芸術の森美術館
デザイン：菊地和広（バックヤード）

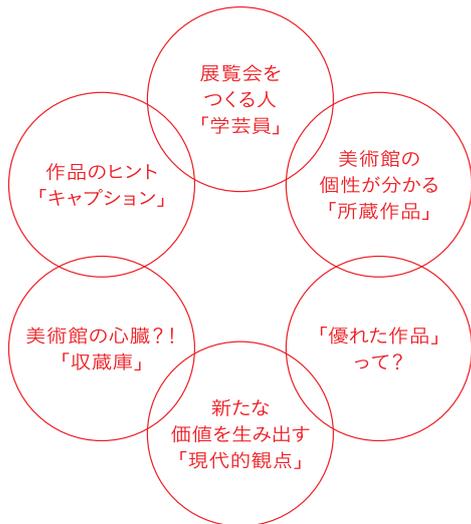
助成：令和3年度文化資源活用推進事業



<https://siaf.jp>

美術館の豆知識!

はじめに展覧会概要とあわせて、美術館を楽しむキーワードをご紹介します。



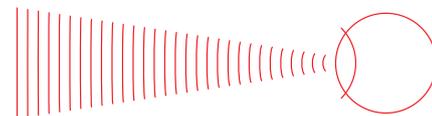
今回の展覧会「きみのみかた みんなのみかた」では、通常の展覧会で必ず作品の近くに添えられている**キャプション**^Aがどこにもありません。作品に関する解説もありません。それは、企画を担う**学芸員**^Bが、まずは来場されるみなさんに、作品をじっくり見てみる、感じてみることから作品を味わってもらいたいと考えたからです。➤

A キャプション 作品情報が記載されているパネル。多くの場合、作品近くに掲出されています。一般的に「作品タイトル」「作者名」「制作年」「技法・材質」「所蔵者」などが記載されています。作品解説が併せて記載されている場合もあります。

B 学芸員 博物館や美術館などで働く専門的職員。資料や作品の収集・保管、調査・研究、展示・公開、教育・普及など、根幹を支える活動を担っています。今回の展覧会も、方針や内容、展示作品、展示方法などは学芸員が考えています。

C 所蔵作品 美術館が所有している作品のこと。「コレクション」などとも呼ばれます。美術館ごとにどのような作品を所蔵するかを定める方針があり、その方針が美術館の個性につながります。

D 優れた作品 美術作品なら何でも所蔵してよい… というわけにはいきません。新たに作品を収集するときには、作品に作家の特徴が表れていることや、作品の変遷上での重要性、制作時の時代や地域のなかでの位置づけ、今後展示・活用機会がありそうかなど、あらゆる観点から次世代に伝えたい作品かどうかを検討します。作品の持つ価値を見極め、整理することで初めてコレクションが成り立ちます。



そしてこの展覧会は、札幌芸術の森美術館に**所蔵されている美術作品**^Cで構成されています。この美術館にほんどんな作品が所蔵されているのでしょうか？

札幌芸術の森美術館は、以下を美術作品収集の基本としています。

①札幌および北海道ゆかりの作家による**優れた作品**^Dを収集する。

②国内外の優れた作品を**現代的観点**^Eから収集する。

③人類の始原である“森”に関わりのある作品を収集する。

開館20周年にあたる2011年に改めて定められたこの方針に従って、現在なんと約1,700点もの作品が札幌芸術の森美術館に所蔵されています。もちろんこれほど多くの作品を常に展示室で紹介することはできないので、通常は**収蔵庫**^Fで大切に保管されています。今回はその中から展覧会の内容に則した約60点が展示されます。

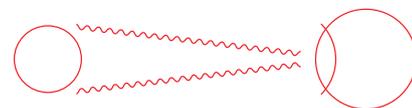
E 現代的観点 1990年の開館時には、展覧会などを通じて「現代」の美術の動向を紹介していくことを活動の重要な柱に位置づけていましたが、2011年には、それを収集方針としても明記しました。そこには、今の時代の作品というだけでなく、さまざまな時代・地域の作品の価値を「現代」という時代の中で捉え直す、という意味も含まれています。作品に新たな価値を見出すことも、美術館の役割なのです。

F 収蔵庫 博物館や美術館の心臓部で、貴重な作品や資料を長期に渡り保管するスペースです。ここでは、作品にダメージを与えないように理想的な温度や湿度が一定に保たれ、かつ厚い扉などにより、安全に作品が保管されています。ただし、近年はこの収蔵庫がいっぱいになってしまう施設も多く、改善が必要な場合もあります。

美術館

ならではの “あの”ルール。 意外に知られていない、その理由。

作品をじっくり見始めてみると、なんだか質感が気になって触りたくなくなってしまうかもしれません。あるいは、「これってなんなの？あとで調べてみよう」と思い、携帯電話で写真を撮ってみたいくなったり。そんな時は必ず、監視員に「申し訳ありませんが、お客様…」と注意されてしまいます。それはなぜでしょうか？



どうして触ってはいけないのですか？

美術館や博物館には、作品を保存し、次世代まで受け継いでいく役目があります。その専門職として学芸員がいることをご紹介しました(P1参照)。実は作品は展示している最中にも大気や光からダメージを受けています。触ることにより皮膚の油分などが着くと、さらに劣化を早めることになります。また、繊細な作品は壊れることがありますし、転倒や落下の恐れを防ぐ目的からも、展示物に触ることは原則禁止されています。

展示室内で使用できる筆記具はなぜ鉛筆だけなのですか？

実はこれも作品保護が目的です。博物館や美術館は多くの方が万年筆を使っている時代からあります。インクを使う万年筆が何かの拍子で壊れてしまいインクが飛んでしまったら！という古い名残から、現在でもボールペンやマジックの使用は控えていただき、万が一作品についてしまっても除去がしやすい鉛筆の使用をお願いしている美術館が多いのです。

どうして写真を撮ってはいけないのですか？

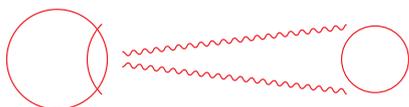
展示されている作品には制作者や所有者がいて、多くの場合、自分で撮った写真であっても制作者等の権利、著作権が発生します。その著作権を保護する目的で、写真撮影は禁止されています。最近では、著作権者の了解のもと個人使用の場合に限定して写真撮影を可能とする美術館も増えています。ただしその場合も、作品保護などの観点からフラッシュ撮影や三脚を使用した撮影は禁止されています。

監視員と学芸員は違うのですか？

はい。異なります。みなさんが展示室で見かける方は、監視員です。監視員と言っても警備員のような制服ではなく、シンプルなスーツなどを着用し、みなさんが心地よく鑑賞できるように配慮しながら、作品の安全と、来場者や展示室の状況を見守っています。一方学芸員は、展示室ではなく、デスクのある事務所にいたり、時には美術館を離れて、展覧会の企画や作品調査など、いろいろな作業をしています。

じつは美術館から答えたいことを聞いたから監視員に作品のことを聞いたら

上記のように、監視員は学芸員と異なり、美術の専門家ではありませんが、展示作品に関しては、事前に学芸員に説明を受けていて、問い合わせに回答可能な場合もあります。より専門的な質問に対しては、事務所の学芸員に確認するなどして回答する場合もあります。

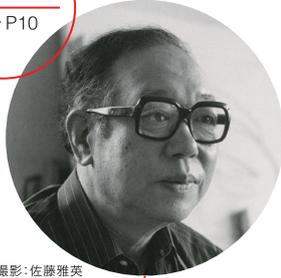


ここからスタート! 作品ガイドは

さあ、ここからは出品作家の中から 北海道の美術史に欠かせない
6名を選出し、本人とその作品を紹介していきます。
まずは作品ガイドを読まずに、まっさらな気持ちで作品を楽しみ、
そのあとに解説を読みながら、また別の“みかた”で作品鑑賞をお楽しみください。



柄内 忠男
P9-P10



撮影:佐藤雅英

坂 坦道
P13-P14



撮影:佐藤雅英

國松 明日香
P7-P8



18

22

1

26

32

52

54

入口

阿部 典英
P11-P12



杉山 留美子
P15-P16



丸山 隆
P17-P18



國松明日香

Asuka Kunimatsu

(1947~)



《水の環》2008年／鉄、ステンレス鋼／サイズ可変

表面がグラインダーで削られ複雑に輝く楕円形。
黒く塗装が施された鉄線。

この要素で構成された彫刻作品で表現されているのは「水」です。
タイトルをみて驚かれた方もいるでしょう。

札幌芸術の森美術館には、水をモチーフにした國松さんのコレクション(所蔵作品)が他にも3点あります。湧水のイメージや、秋に降る長雨のイメージなど、異なる姿の水が軽やかに表現されています。

國松さんは、北海道の昭和の絵画界を牽引した国松登さんの長男として、小樽に生まれました。しかし、父と同じ絵画の道には進

まず、大学では彫刻を専攻します。1980年代、日本で公共彫刻の設置が盛んに行われるようになると、國松さんも公共彫刻を多く手がけることになります。

新千歳空港に設置された國松さんの作品《北の翼》は約9mもの高さがあります。ここまでのサイズになると一人では制作できず、工場などへの発注が必要でした。

巨大な屋外作品の制作を手がけた國松さんは、1991年から札幌市立高等専門学校(現・札幌市立大学)での勤務をきっかけに、金工室での制作を始めます。そこで改めて、手仕事によるさまざまな表現の試みを始めます。その時にふと思い出していたのが、画家であった父のモチーフであるといいます。

「父が逝ったのが1994年4月18日。この年はものすごく雪の多かった年で、その春先、雪解け水で川が大変に氾濫しました。2001年、その命日にあたる時に作品を制作していて、ふと、激流渦巻く川のこと、父が画のテーマとしていた水のことなどが思い出されたのです。そこで、水を彫刻にしてみようかと思い立ちました。」

図録「國松明日香展 一風、水面ふるわし、そよぎゆく光」
札幌芸術の森美術館 2008年より

日常の風景をどのように、どんな素材で表現することができるのか。
皆さんもそんなことを考えながら、もう一度作品を感じてみてください。

○札幌芸術の森美術館 所蔵作品



《水脈を聴く》2001年／鉄、ステンレス鋼／サイズ可変



《秋霖》2006年／鉄、ステンレス鋼／187.0×370.0×80.0cm



《還る水》2008年／鉄、ステンレス鋼／サイズ可変

○参考作品



《北の翼》1990年／コールドレン鋼

栃内忠男

Tadao Tochinali

(1923~2009)

大きな画面全体にぐいぐいと広がるような茶色のライン。ここに描かれているのは、実は窓枠です。大きく歪曲しているので、窓のように見えないかもしれません。そして、窓の外に見えるはずの景色も描かれていません。作者は最晩年、この作品を含む「窓」のシリーズを手がけていました。札幌芸術の森美術館は他にも3点、このシリーズの作品を所蔵しています(下段)。この作品は、栃内さんのアトリエにあった、外光が差し込むすりガラスの大きな窓がモチーフになっていると言われています。

このアトリエで多くの作品を残した栃内さんは、「絵画する」という言葉をよく用いていたそうです。それは「絵を描く」とは異なります。「絵画する」とは単に描くのではなく、私たちの周りの3次元空間をキャンバスという2次元に「再現」するものでもなく、自らの意思を反映させ独自の世界を作り上げることでした。さらに、彼が人前に出せる作品の基準としていたのは、形と色が自分の意図するように表現できたかどうかで、沢山描き込むということではなかったそうです。塗り残しがあるまま完成した作品も多くあります。

彼が敬愛して止まなかったピカソの言葉を本人の文章からご紹介します。先入観にとらわれず純真に絵画に向かう姿勢の大切さと難しさをよく表している言葉です。

「今世紀最大の画家という言葉が、ピカソほどあてはまる画家は他にいない。“天才”につきものの、エピソードも数知れない。『まるで、子供の描いたような絵だ』と言われたこともあった。しかし、ピカソは答える。『私は、子供のように描けるようになるのに50年もかかった』と。」

「栃内忠男画集」共同文化社 1998年より



《窓》2006年／油彩、キャンバス／227.2×162.0cm

○参考写真



窓のあるアトリエの様子(2021年) 撮影: 栃内 譲

○札幌芸術の森美術館 所蔵作品



《窓》2007年／油彩、キャンバス／227.5×182.0cm



《窓》2007年／油彩、キャンバス／182.5×227.0cm



《窓》2008年／油彩、キャンバス／226.5×146.5cm

阿部典英

Ten-pei Abe

(1936~)

2種類の紙の断片が貼り重ねられた上に、独特な線で、目力のある人物が描かれています。2人は同じ人物なのか別人なのかわかりませんが、片側の人物は鳩を抱えています。画面の下の部分には、麻布が貼り付けられていて、不思議な文様が展開されています。この作品は、制作された時代に密接に結びついています。その時代を紐解いていきましょう。

札幌市に生まれた阿部さんは、独学でいろいろな作品に挑戦していきます。その中で、第2次世界大戦後の世界の状況やアートの潮流を強く意識した7名のメンバーによる「グループ組織」で、1963年から活動することになります。1960年代の日本というのは、高度経済成長期でありながら、安保闘争や学生運動、ベトナム戦争への反戦運動など、政治的な運動が盛んな時代でした。

「グループ組織」は、3年半にわたって精力的に活動し、徹底した討論を基本としながら札幌と東京で10回の展覧会を実施しました。この阿部さんの作品は、ベトナム戦争をテーマに開催された第9回展に出展されていました。ベトナム戦争がテーマであるとするれば平和のシンボルである鳩もモチーフとしてつながってきます。

○札幌芸術の森美術館 所蔵作品

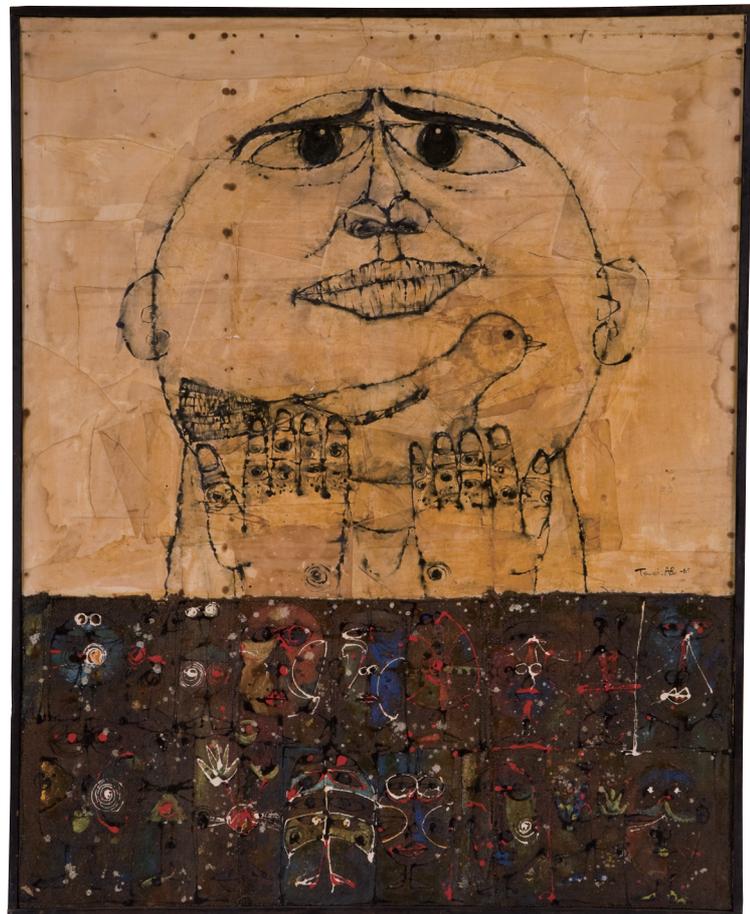


《ネエ ダンナサン あるいは 壇》
2001年/木、アクリル絵具、黒鉛/220.0×400.0×350.0cm

また、下部の麻布の表現は、当時のヨーロッパで盛んであった力強い筆致などが残る「熱い抽象」と呼ばれる作品傾向の影響とも言われていますが、よく見ると、無表情の不気味な顔の群にも見えませんか。

《ネエ ダンナサン》という印象的なタイトルは、アメリカの小説家スタインベックの「ハツカネズミと人間」という世界恐慌時代を必死に生きる労働者たちの物語から発想したそうです。これは、一体、誰に向けられた声かけなのでしょう。その時代背景から想像してみることができのでしょうか。

阿部さんは、1994年より再び《ネエ ダンナサン》というタイトルで始まる彫刻のシリーズを制作しています。そこでは、社会的な状況に目を向けて作られた1965年の作品から、人間の根源的な生命力というようなものへの視点が感じられるほどに、さらに深まりをもった変化を遂げています。



《ネエ ダンナサン》1965年/油彩、紙、麻布/各162.0×130.0cm

坂坦道

Tando Saka

(1920~1998)



《話》1982年／ブロンズ／13.3×10.3×9.4cm

二人がピッタリと寄り添い、何かを見上げながら話をしています。その視点の先には何があり、二人はどんな話をしているのか気になってきます。坂さんは日常的な風景のひと時を切り出し、その様子を彫刻にした作品を多く手がけています。

坂さんは石川県に生まれたのち、10歳の時に札幌に移住。その後、東京美術学校(現・東京藝術大学)で彫刻を学びます。昭和30年代には、道展の中核として活躍し、画家の亀山良雄さん、金工作家の島山三代喜さんとともに「道展三羽がらす」と呼ばれました。社会の下層で生きる人々の哀愁ある表現やピエロなどのアクロバティックな動きのほか、日常の何気ないポーズを得意としました。《背もたれによる女》からも、気取らない自然体の姿を感じられるのではないのでしょうか。椅子の背にのせた頭の重さが伝わってくるようです。

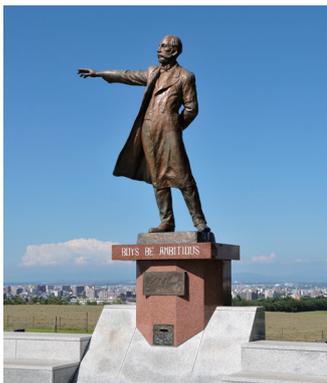
坂さんは北海道の代表的な観光ポイントの彫像も手がけています。みなさんよくご存知の、さっぽろ羊ヶ丘展望台《丘の上のクラーク》です。

展示作品も《丘の上のクラーク》も、そこに表現されている人物が何を思い、考えているのか、そんなことを想像させる作品だと思いませんか？



《背もたれによる女》1986年／ポリエステル、木、鉄／105.0×56.0×70.0cm

○参考作品



《丘の上のクラーク》1976年



北辰中学校の生徒が《セザンヌのモニュマン》を制作している様子(出典:さっぽろ雪まつり40回記念写真集)

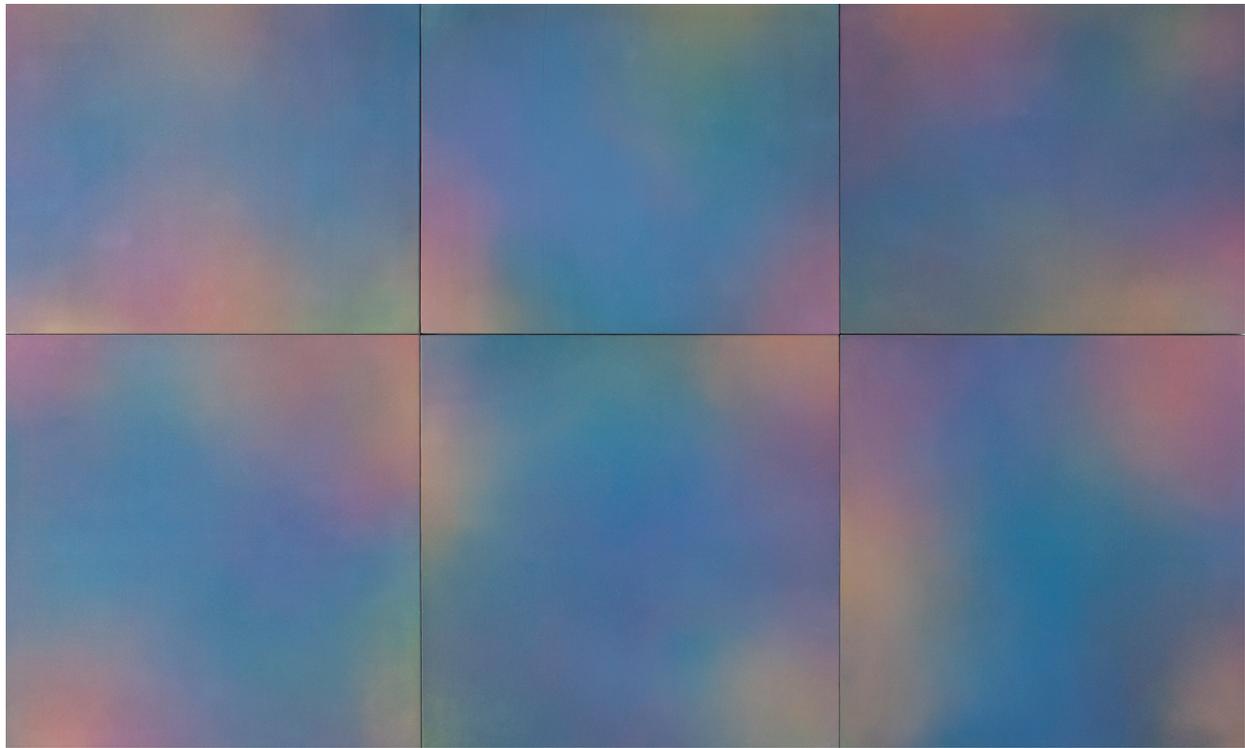
○雪まつりコラム

1950年に開催された第1回さっぽろ雪まつり。横たわる裸婦像(左)をみたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。実はこの雪像の制作を指揮したのが坂さんでした。当時、坂さんは勤務する中学校の男子学生とともに、ロダンの《バルザック》(1891-98年)とマイヨールの《セザンヌのモニュマン》(1925年)の雪像を作ったそうです。栃内さん(P9-10)も学生と一緒にルーブル美術館の《うづくまるヴィナス》をモデルにした雪像を作っています。当時の雪まつりでは雪像で彫刻作品を再現するという意識が強かったのかもしれない。

杉山留美子

Rumiko Sugiyama

(1942~2013)



《HERE - NOW あるいは妙光》2004年 / アクリル、キャンヴァス / 162.0×270.0cm

同じようできて少しずつ異なる文様の6枚のキャンヴァスが組み合わせられ、万華鏡的に新たな文様を生んでいる。鮮やかな色彩でありながらも、それぞれが主張しあわずに静かに溶け合い、つかみどころなく移ろいゆく。

杉山さんは、色彩が人間の思考や生理にもたらす作用をずっと探究していました。赤い色を見た時、私たちの心にどのような変化が生まれるのか、青い時はどうなのかということです。そして、画面全体が赤、次いで青で覆われたシリーズを展開した後に、今回展示したような虹色の作品に行き着きました。ここに表された7色は、光をプリズムで分解した時の色を思い起こさせます。

作品タイトルにも注目してみましょう。「HERE・NOW」、つまり、「ここ」と「今」という自分の立ち位置を明らかにする言葉のあとに、「妙光」という言葉が続きます。札幌芸術の森美術館は《HERE・NOWあるいは難思光-7》(下)という作品も所蔵しています。

○札幌芸術の森美術館 所蔵作品



《HERE・NOWあるいは難思光-7》2011年 / アクリル、キャンヴァス / 91.0×237.0cm



《WORK 9911-1》1999年 / アクリル、キャンヴァス / 193.9×291.0cm

これらのタイトルにはキーワードとなる言葉が含まれています。光、そして妙光・難思光という言葉です。

「難思光」という言葉は、阿弥陀仏の徳を12通りの光に例えた一つで、想像もできないほどの力を意味します。「妙光」は菩薩の名にもなっています。どちらも仏教に深く結びついた言葉であることが分かります。ここでいう「光」は、目に見える物理的な光というよりは、心を照らす光と言った方がいいかもしれません。

1942年に札幌で生まれた杉山さんは、札幌で絵画を学び、作品を発表し続けました。ヨーロッパで目にした西欧の文化に違和感を覚え、インドを訪れたことで東洋的な哲学に強い関心を持つようになります。その後、1983年に訪れたインドの秘境の仏教寺院で、極彩色の曼荼羅に埋め尽くされた空間に身をおいた体験から、色彩によって人の意識を、日常的な感覚から非日常的なものに変えさせることができると確信したそうです。さらにその10年後、京都伏見稲荷の千本鳥居で、柱の朱色と木々の緑の交錯のなかに色彩が発光してみえる体験をするのです。

「今、私が表現のなかでこだわっているのは、あの体験で得た感覚の再現なのだ。物質感を消し去り、内発する光を持った色彩をどう作り出すかが大きな課題になっている。」

久米淳之「杉山留美子一色彩に光が宿るまで」『杉山留美子 光満ちる時 これくしょん・ぎやらい』北海道立近代美術館 2009年より

さあ、みなさん、改めて作品を見てみてください。色彩はどう感じられますか？



《WORK 9911-2》1999年 / アクリル、キャンヴァス / 193.9×414.5cm

丸山隆

Takashi Maruyama

(1954~2002)



《不可視コード》1996年／耐水合板、エポキシ樹脂、アクリル塗料
(黒)124.0×138.0×121.0cm (赤)142.0×138.0×143.0cm

黒と赤の大きな立方体のようなものが置かれています。でも、板が反り返ってばらけてきています。内側もみえます。どうしてこんなに歪んでしまったのでしょうか。これからさらに解体して壊れていきそうに感じませんか。

丸山さんの作品には、簡潔な形のものが多いのですが、その形がどのような構造をしているのかということや、形が変化していくことへの興味を感じられます。物質自体が内に秘めている力。引力や磁力のように場に及ぼす力。あるいは、大地が気が遠くなるほど長い時間をかけてゆっくりと移動し変形していく力。そうした力によって歪んだ形がもつ緊張感を通して、エネルギーの充満と解放を感じさせ、直接見ることはできない力を視覚化しようとしているのでしょう。

丸山さんは長らく石彫を手がけていました。1954年に長野で生まれ、東京藝術大学で彫刻を学んだ後、1985年、31歳の時に、北海道教育大学の彫刻の教諭として札幌にやってきます。教鞭を取りながら、自身も彫刻家として石の作品を精力的に作っていきます。

今日、札幌芸術の森から中央バスで真駒内方面にお帰りになる方は、バスを降りて真駒内駅に向かう途中にある石の彫刻にも注目してください。これも丸山さんの作品です。この《ひとやすみする輪廻》は、オープンして間もない札幌芸術の森の彫刻アトリエで制作されました。

○札幌芸術の森美術館 所蔵作品



《残留応力》1992年／木、花崗岩、塗料／187.0×50.0×50.0cm

○参考作品



《ひとやすみする輪廻》1986年 撮影：並木博夫



石山緑地《ネガティブマウンド》1993-1996年

そして丸山さんは1993年から、石を素材にした最大級の作品を手がけることとなります。國松明日香さん(P7-8)、永野光一さん、松隈康夫さん、山谷圭司さん、という5名の同世代の彫刻家で「CINQ (サンク)」というグループを結成し、石山緑地の造成プロジェクトに参加しました。《ネガティブマウンド》の造形に、丸山さんは細部までこだわったということです。

1990年代になると作品の素材は石だけでなく、木や金属なども自在に使われるように変化していきました。

《不可視コード》というタイトルは、1996年～2002年に制作された丸山さんの作品の多くに用いられています。赤色の小品や鉄板を構成した巨大な作品、既製のガスボンベをカットした作品、人が内に入る布製の作品など、素材や形体、サイズもさまざまですが、そこには形の構造と力の視覚化を求める一貫した姿勢をみることができます。今回展示した作品は、その早い時期のもので、1996年に北海道立旭川美術館で開催された「木の造形 旭川大賞展」において25人の出品作家のひとりに選抜され、制作しました。

1998年の図録にこんな言葉が記されています。

「作品への感情移入によるものではない、言語的なものでもない、もっと原初的な『視覚がもたらす脳の興奮』も十分に芸術と成り得るのではないだろうかと思っている。」

札幌彫刻美術館・第9回「北の彫刻展」図録 1998年より

「視覚がもたらす脳の興奮」、みなさんは感じる事が出来ますか？

教えて吉崎さん!

札幌芸術の森美術館に開館準備段階から学芸員として たずさわり、2016年3月まで副館長として勤務されていた吉崎元章さん(現・本郷新記念札幌彫刻美術館 館長)に、札幌芸術の森美術館のコレクションと北海道ゆかりのアーティストの魅力をお聞きしました!



撮影: 詫間のり子

札幌芸術の森美術館の所蔵作品(コレクション)の特徴や魅力を教えてください。

実 は当初の「札幌芸術の森」計画には美術館はなかったところからお話ししますね。1986年の札幌芸術の森オープンから遅れること4年後、1990年に芸術の森美術館が開館しました。もともとは野外美術館内に彫刻の屋内展示ギャラリーをつくる予定だったのですが、当時の札幌には大きな展覧会を開催できる美術館が北海道立近代美術館しかなく、もっと美術に触れたいという市民の声の高まりを反映して計画が変更されました。そうした関係もあり、新しくできる美術館のコレクションでは、野外美術館に設置されている彫刻の多彩な表現につながるものとして、国内外の近現代彫刻を系統的にたどることができるようにすることを目指しました。ロダンから始まる西洋の近代彫刻の流れ、そしてその影響を受けて展開された日本の彫刻などです。その点では国内有数のものだと思いますし、特に日本の伝統的な木彫の流れを汲む作品が充実しているのが特徴です。それに加えて、札幌ゆかりの作家の作品収集にも力を入れてきました。個人コレクターからまわって寄贈していただいたユニークな作品群もあります。

吉崎さんは道内作家の展覧会を数多く企画されてきましたが、道内のアーティストに興味を持ったきっかけを教えてください。

3 つあります。
1つは、作家との直接の出会いや交流です。学芸員になりたてのころに、なんとといっても、本田明二さん(1919-1989)にはお世話になりました。本田さんは北海道、札幌の美術におけるリーダー的な存在の彫刻家で、毎年アトリエで忘年会があって参加させてもらっていました。阿部典英さん(P11-12)など活躍している作家が大勢集まってきていて、本当に楽しい時間だった一方で、本気で美術で生きている人と間近に接することができて、自分にとっては、そこに新しい世界があったんですね。
2つ目は、作家との距離感の変化でしょうか。学芸員と作家の間には、初めは必ず壁があって、みんなよそよそしいんですよね。ですが、例えば柄内忠男さん(P9-10)の展覧会の準備で、何度もアトリエに通ってお会いしているうちに、徐々に心を開いてもらっていると感じるようになりました。まだ誰にもしていない話や見せていない作品を拝見させていただけるようになってきて初めて、その作家の芸術の本当に深い部分に触れることができたような気がしたんです。それとともに、どのようにそれを展覧会に反映させるかという責任の重さも感じましたね。
3つ目は、作家との現場作業ですね。作家は、展示室で我々の想定を遥かに超えることをしようとすることがあります。土を持ち込み

たいとか石膏を床一面に流したいとか。そういう無茶なアイデアをどうやったら実現できるのか、共犯者のような気持ちになって挑戦していくこと自体が楽しかったですね。
こういった細かい実体験が自分のベースになっていると思います。札幌の美術館として地元の美術にしっかりと向き合っていくことは不可欠ですが、私は特に、北海道という特有の歴史や気候、自然環境を持つ地だからこそ生まれる独自の表現について、ずっと関心を持ち続けています。

今は館長を務めている吉崎さんですが、これまで学芸員として関わられた多くの展覧会で、忘れられないエピソードがあれば教えてください。

展 覧会のための調査をいくつもしていくなかで思いついた企画が、結果的に北海道美術の大きな流れを捉える新しい視点となり、評価されたことでしょうか。そのひとつが「中根邸の画家たち」という展覧会です。いろいろな作家にお話をうかがっていると、かつて中島公園の豪邸に住んでいたパトロンの話が度々出てくるんです。高名な画家が東京から頻繁に出入りしていたとか、戦後すぐに絵画学校が開かれていたとか。しかし、北海道美術史などの文献には全く記録されていないんですね。なんとか糸口を見つけて調査を続け、中根邸のご遺族をハワイまで訪ねたりなどもして、展覧会でその実像を浮かび上がらせることができました。
もう一つは「さっぽろ・昭和30年代」という展覧会です。突然札幌に現れ10年後に急逝するまでの間、札幌の美術に旋風を巻き起こした、なかがわ・つかさという美術評論家に焦点を当てたものです。これは古い新聞の展覧会評を調べている時に度々目にした、とても辛口な文章への興味がきっかけでした。展覧会にするまで10年かかりましたが、この成果として美術館連絡協議会のカタログ論文賞で優秀論文賞をいただきました。今はその後の時代を扱った展覧会を企画したいと思っています。



撮影: 詫間のり子

今後このようなガイドブックで、取り上げたいアーティストがいたら教えてください。

作 者というより、鑑賞をいかに深められるかということに興味がありますね。この「SIAFふむふむシリーズ」では、美術館の学芸員が思いつかないようなアプローチで、作品をもっと楽しむことができる方法をどんどん試してもらいたいですね。

SIAF ふむふむシリーズ

サイアフ SIAFふむふむシリーズとは？

「SIAFふむふむシリーズ」は、札幌国際芸術祭実行委員会が、展覧会や展示作品をより楽しむ方法や情報を提案する新しい鑑賞プログラムです。今年度は、SIAFの主要会場である市内4箇所の文化施設と連携し、「知る、体験する、共有する」た

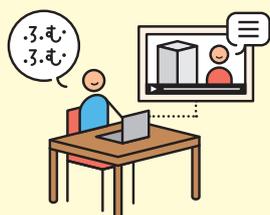
めのプログラムを発信しています。

札幌芸術の森美術館では、「きみのみかた みんなのみかた」において「知る、体験する、共有する」ための3つプログラムを展開します。

1 知ろう!&体験しよう!

おすすめスポットMap&紹介動画

札幌中心部から札幌芸術の森美術館までのルートと、学芸員・SIAFスタッフがおすすめる周辺スポットを集めたMapを公開中。YouTube動画では学芸員のコメントも併せて紹介しています。



プログラム
紹介ページ



SIAF
YouTube
チャンネル



2 体験しよう!

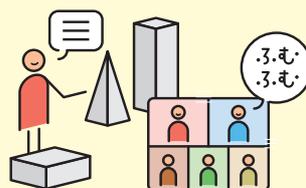
特別ガイドブック

今、手に取っていただいたこのガイドブックでは、趣向の凝らされた本展覧会の出品作品の一部を作品の背景や作家情報とともに楽しんでいただくことができます。意外と知る機会が少ない美術館の基本的な豆知識も掲載しました。

3 体験しよう!&共有しよう!

ゲイモリナイトミュージアム

札幌芸術の森美術館とSIAFがタッグを組んでお届けするオンライン鑑賞ツアーです。展示作品の魅力を、閉館後の美術館から学芸員がオン



ラインで一生懸命お伝えします。普段は覗くことのできない「収蔵庫」にもご案内します。

日時 2022年2月26日(土)、27日(日)
各日とも17:00-18:00

参加方法 YouTubeライブ配信
(要申込・視聴用URLを事前にご案内します)

参加費 無料

申込方法 SIAF公式ウェブサイトから
お申し込みください
<https://siaf.jp/event/p14965/>



申込締切 2022年2月20日(日)

札幌国際芸術祭(SIAF)とは？

札幌国際芸術祭(Sapporo International Art Festival 略称:SIAF)は、3年に一度、札幌市内の美術館や文化施設、そして街中を舞台に、時代に呼応したアート作品やパフォーマンスなどを紹介する、国際的なアートの祭典です。

2014年に第1回、2017年に第2回が開催され、これまで

ワークショップ、トークイベントなどの参加型プログラムも数多く展開してきました。3回目となる2020年は残念ながら中止となりましたが、「SIAF2020特別編」として予定されていた企画の紹介展示やオンラインプログラムを実施。2021年3月には記録集を発行しました。現在は2023年度冬の開催に向けて準備を進めています。